

# ほほえみ



ともにほほえむ

題字は横浜市栄区にお住まいの小杉幸子さん（85歳）  
まだまだお元気で、書道のほか水彩画・表装・編み物・折り紙などなど趣味は数え切れない  
ほどあり、お友達との交流を楽しんでいます。

## 第十四回 関東甲信越ブロック研修会

山梨県大会に本県より三十二名の参加

神奈川県介護福祉会

副会長 三ヶ島靖子

本年は大型バスをチャーターしての参加となりました。九月二十一日全員時間前に集合し、ゆったりとした車内で思い思いのグループになり、会話が弾みました。バスは一路、晴天の甲斐路を甲府富士屋ホテル目指して走りました。

翌日は研修終了後、ワイン工場見学、ぶどう狩りを楽しみました。車内では、第三分科会『火』介護予防での事例発表者である理事佐藤陸子氏の労に対し、拍手をもってねぎらい、帰路につきました。

さて、記念講演は、『ヘルプマン』くあたりまえのことを描くことで、伝えられる想いの著者、漫画家くさか里樹氏の講演です。参加者のおおくの方は、くさか氏のファンの様子。私は不勉強ではじめて接しました。

くさか氏は二〇〇三年から高齢者介護の現場を舞台にした漫画「ヘルプマン」について語られました。介護については未経験であるため参考書籍を読み、介護関係者に会い、現場に行くうちに、人間らしく生活感に溢れていて、型破りで、ユニークで介護に情熱を燃やす若者に会い、それが漫画の主人公となったのだと、ご自分の「ヘルプマン」に対する思いを、熱く語られました。



ところで、氏は介護に関しては全く未経験ということですが、介護現場での細かい考えに感銘を受けました。最後に「ヘルプマン」の百太郎の今後の活躍にエールを送り、介護の専門職である介護福祉士は、一層研鑽に努めなければならぬとの思いを新たにしました。

以上

## 地域密着型認知症デイサービスにおける 介護予防の実践をとおして「見えてきたもの」

神奈川県介護福祉士会 理事  
有まるなかデイサービス施設長

佐藤 陸子

秋の気配漂う山梨県に於いて、「介護福祉士と自立支援」  
あなたの笑顔のためにできることをテーマに、第一四回関  
東甲信越ブロック研修会（九月二十一日（金）・二十二日）が  
開催されました。

今回、神奈川県介護福祉士会から理事の佐藤陸子さんが第  
三分科会『火』介護予防において、「地域密着型認知症デイサ  
ービスにおける介護予防の実践をとおして「見えてきたもの」  
と題して発表いたしましたので、ここにご紹介いたします。

### 一はじめに

私は一九八九年十月に特  
別養護老人ホームに入職、  
一九九〇年十月のデイサービ  
スセンター併設時から、職員  
としてデイサービスに携わっ  
てきました。開設当初のデイ  
サービスは一日二十人以内の  
小規模のデイサービスで、主  
に認知症の方が利用されてい  
ました。二〇〇二年十月に施

設の事業拡大で定員八十名の  
大規模デイサービスになり、  
そこで各々のメリット、デメ  
リットを経験してきました。

大規模のデイサービスは「目  
的意識を持って自分で選択で  
きる利用者にとつては楽しい  
場所」です。大規模デイサー  
ビスが気に入っていらっしや  
る方も沢山いらっしやいます。  
しかし一般的に大規模デイサ  
ービスは利用者数に対して職

員が少ないため、「自分の意  
思を上手に伝えられない方々  
にゆとりを持ってゆつくりお  
話を聞くことや終日会話を交  
わすことが少なくなつてしま  
う」傾向が見られます。認知  
症でなくとも大勢の利用者の  
中で孤独を味わい、居場所の  
無い心細さに落ち着きなく過  
ごしている方々も、隣に座つ  
てゆつくりお話を聞いて差し  
上げるだけで落ち着き、寄り  
添って行動を共にすることで  
安心して素敵な笑顔が見られ  
た等の経験から、大規模デイ  
サービスの居場所が無く  
落ち着かない方々を目の前に  
して、こんなことで良いのだ  
ろうか？と疑問を感じました。

当時私と同じ考えの仲間が  
集まり私の定年を機に「一人  
一人の心のひだに寄り添い安  
心して過ごして頂くには小規  
模デイサービスでのきめの細  
かな対応が絶対に必要である」と  
確信し、横須賀市で初めて  
の認知症単独型通所事業所と  
して「まるなかデイサービス」  
を開設し、三年が経過しまし  
た。今回介護予防についてア

プローチした中から「介護予  
防の実践をとおして見えてき  
たもの」としてまとめました。

二まるなかデイサービスの概要

二〇〇四年七月一日開所

定員：十名（現在：一二名）

職員数：責任者一名・介護

職十一名（含：介護福祉士

八名）・調理員二名

○認知症の方の生き方を大切  
にするデイサービス作り

・施設作りよりも家作り（居



心地の良い、安らぎの空間作り)

- ・玄関は明るく広く、利用者が入りたくなるムードにする
- ・民家を改築し、生活リハビリを考慮し、あえて室内の段差を残す
- ・畳の部屋を残し、より家庭的な雰囲気を出す
- ・利用者二人に一人の介護職員を配置、非常勤も1日通して勤務
- ・職員は外部研修に積極的に参加しレベルアップを図る
- ・利用者への対応心得として「クリステン・ブライデンさんの言葉」を掲示

三地域密着型認知症デイサービスにおける介護予防への取り組み

二〇〇六年四月からは、地域密着型認知症対応型通所介護事業所・介護予防認知症対応型通所介護事業所として介護予防をどのようにするかを考え、介護予防に取組んだ。認知症の方は、「自分でリハビリをして良くなりたい」と考える人はまれであり、「痛いこ

とはいや！」「いやなことはやりたくない」が本心です。パワースタッフをやるよりも、「またデイサービスに行きたい」と利用者本人に思っていた。ただけるような楽しい雰囲気作りを心をくぐり、現状維持を目標に取り組んできました。

【事例】

(一) 利用者のプロフィール  
・九十五歳の女性。要支援の状態。平成十六年七月からデイサービスの利用を開始。現在は要支援2。  
・生活歴：宮城県出身。二十歳で横須賀市に転居。二十年前に夫が死亡し現在は独居。

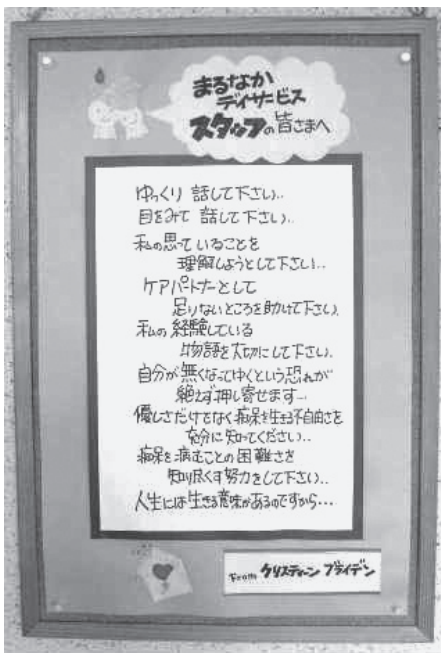
・家族：同じ敷地内に長男夫婦が住み、時々食事のおかずを運ぶなどして、様子を見ながら自立を支援している。

・身体状況：平成十六年六月に転倒して右肩骨折。上肢挙手時に少し痛みが残っている。血圧が高めであるが、月に一回近隣の内科に受診している。

・A D L  
① たまにナベを焦すことがあるが、食事作りや洗濯、掃除などは自立。

② 自宅入浴は下肢が弱く転倒の危険性があるため、デイサービスでの入浴を希望。

③ 立ち上がりは、何かにつか



※認知症をと診断されながらも、自信の視点・立場から、講演や執筆活動を通し、世界に広く「認知症の人に対する理解を求め、認知症の人の尊厳を訴える」活動をおこなっている。

まることで可能。室内は、いざって移動している。

④ 外出はシルバークーに体を預けて歩くため、わずかな段差でも転倒しやすい。

⑤ ラジオの電源と音量スイッチを間違えて壊れた！と何度も長男夫婦に訴えるなど、軽度の物忘れがあるも認知症の周辺症状はみられない。  
・社会参加：聴力の低下があり、長男夫婦が来た時にしか話す機会がない。

・本人の意向  
① 「これ以上悪くなったら大変」と言い、自分で出来ることは頑張っている。

② 自分なりに家事をこなしていることに自信を持っている。

③ 風邪を引くこともなく、健康には自信がある。

・家族の意向

① 閉じこもりがちになって体に良くないのでデイサービスに参加して欲しい。

② 誰とも話をしなくなる心が心配。

(二) 介護予防ケアプラン上の目標 (平成十九年一月四日)

平成十九年六月三十日)

- ① 安全に入浴するために支援していく。
- ② 手工芸時に声かけを増やし、社会的交流の場を提供していく。
- (三) 個別援助計画と実施 (週一回)
- ① 安心して入浴していただくために下肢の筋力とバランス感覚をつける為一日三十分の運動・有酸素運動をする。
- ・ 鉄道唱歌に合わせて股関節を広げたり閉じる運動
- ・ リハビリ体操 (ビデオを見ながら高齢者の ADL 体操)
- ・ 片足を持ち上げ、持ち上げた足をキープ等
- ② 社会的交流の場となるように話しやすい環境を作る
- ・ 話しの場合利用者同士が隣り合うように席の並び順に配慮。
- ・ 難聴のため職員が間に入り、地域の出来事や故郷の思い出話など興味ある話題を他の利用者と共有出来るように提供する。
- ・ カルタ取りや風船バレー、じゃんけんゲームなどの対

### 楽しみながらの有酸素運動



- ・ 抗意識が芽生え楽しめるゲームを取り入れる。
- ・ 簡単な作品作りから徐々に高度の作品作りに取組んでいただく。
- (四) 評価
- ① ・ 浴槽のまたぎが楽になり、

- ② ・ 休んだ人への気遣いが見られるようになった。
- ・ 自分の生い立ちを素直に話すようになった。
- ・ 作品作りに熱心に取組み、完成時には嬉しそうに持ち帰るようになった。

職員の声掛けで入浴が自立で行えるようになった。

- ・ 自宅での日常生活及び活動性が継続できている。
- ・ 今年の七夕の願い事に「いつまでも歩けるように」と書いた。
- ・ 自分でも歩こうという意欲が高まっている。
- ・ 室内の移動は、いざることがないが無くなくなってきた。

四地域密着型認知症デイサービスにおける「予防介護を実践して見えてきたもの」

- ① 加齢とともに一年毎に筋力の自然低下が起る高齢者にとっては、「如何にして現状維持を長く保つか」が介護予防につながると思います。
- ② 現状維持の「項目」と「目標」の決め方は、何を現状維持の項目に決めるか、その目標値をどのように決めるかが難しいと思います。また「項目」は具体的に表現し、「目標」は達成度が把握できる内容にすることで取組みの成果がつかみやすくなります。
- ③ 高齢者の一番のリハビリは何かということ。高齢者の多くは、「今更リハビリなどしたくない」「痛いことはいや」「いやなことはやりたいくない」と思われているのが現実のようです。そのためには、ゲームや音楽に合わせて「楽しみながら体を動かす」ことが一番の

リハビリになります。

④利用者にとって大切なのは、適切なケアプランの作成とデイサービスで支援した結果をケアマネに戻して、ケアプランの修正につなげ、利用者にとってより良いものにしていくことです。そのためにも、モニタリングが大切で、ケアマネと事業所の連携を密にしていくことが必要です。

⑤つぎに利用者を見る目です。「何も変わっていない」「前回とお変わりなくお過ごしでした」という思いこみは、利用者の観察が足りないと、思います。要は、利用者の表面に現れない微妙な変化に気づく事が大切です。

⑥要支援の方も要介護の方もその日によって状態が変わります。要支援だから要介護だからと分けることなく「利用者の気持ちに寄り添い、些細な変化にも心を配り、信頼関係を深めるように関わる」ことで、安心して心地よく過ごしていただくことが大切です。

笑顔に勝るリハビリなし  
心が動けば体も動く

五今後の課題

①「現状維持」を介護予防の成果として家族やケアマネジャー・行政等へどの様に発信していくか。「現状維持」の評価をどの様にするか。  
②最適なケアプランと個別援助計画の立案能力を磨くこと及び目標達成のための実践のノウハウをいかにして集積し身に付けるか。



介護福祉士会関東ブロック  
事例発表を経験して

理事 佐藤陸子

それは五月三十日の夕方突然一本の電話から始まった。「関東ブロックで神奈川県は介護予防が担当になったので事例発表をしてほしい。」との突然の依頼に何をどのようにまとめてよいのか試行錯誤の中で、会長はじめ昨年の関東ブロック実行委員長や査読委員さん達の丁寧なご指導の下に先日、山梨県で無事に発表をする事が出来ました。

「認知症デイサービスにおける介護予防の実践をとおして見えてきたもの」とテーマが決まってから発表までの三ヶ月間は終わってしまえば本当にあつという間の出来事でした。

いろいろな資料をかき集めて検討を進める中で本当に介護予防はこれでよいのか？と言う疑問が湧き、改めて介護予防を考える機会を与えていただきました。

発表のポイントである介護予防は「今より認定が重くならないようにするためにどんな手立てが必要か?」「今出来ることをいかに長く現状を維持させることが出来るか」が課題であり、そのことをどのように書き表して評価していったらよいのかを改めて考えさせられました。

発表を終えた後 助言者の先生から「一人一人丁寧なかわりをするから見えてくるものがたくさんある。『せきたてない』、『ありのまま』、『よい』、『その中でしっかりと向き合い、利用者とかかわること、トラブルも少なくなる。現状維持の言葉は後ろ向きにも聞こえるが前向きにとらえることが出来る。この言葉の意味をもっとみんなで共有し、議論を重ねていくことが大事です」とのコメントを頂き、わが意を得た気持ちが致しました。

発表にあたり多くの皆様のご協力をいただきましたことを心よりお礼を申し上げます。

**各分科会に参加して**

**第一分科会 「風」**

**感染予防・口腔ケア**

久保 信子

感染症は、現場で働く私たちがまず、媒介者にならない様にすることが大前提です。

たとえば、疥癬と診断されるとたいへんなことでした。個室に移し、六一〇ハップ剤で入浴し、入浴後は軟膏を塗布し、シーツ交換を毎日行い、病室にはいるときはガウンテクニクが必要で、私たちが他の患者にうつさないように細心の注意を払い、何日もかけてケアをしていました。発表事例は十六年八月から十一月にかけての取り組みでした。会場から現在では内服薬と軟膏で治療でき、治療日数が短縮されているとの情報提供がありました。重症でなければ、個室に移すこともなくかゆみに悩まされる期間が短縮され、介護される側もする側も救われる思いがします。医療の進歩のすごさを改めて感じました。

口腔ケアは、入院中のIVH管理の利用者が、療養型病院へ

転院する前に本人の強い希望で在宅に戻る十日間の訪問介護の取り組みでした。口腔ケア・口腔リハビリなどの援助によって、発語が聞き取れるようになり、声を出して笑うことに繋がったという。十日間のために家族や他職種との連携が密であった事が良い結果をもたらしたと思います。口腔ケアの大切さを痛感！助言者の牛山先生から口腔内には約七〇〇種類の細菌がいるとお聞きしました。食事をする際にもおいしく食べるためにも口腔ケアを大切にしていきたいと思えます。

**第二分科会 「林」**

**身体拘束・事故防止**

阿部 良子

「身体拘束」という言葉は、療養型医療施設に勤める私には胸の痛くなる言葉である。十年ほど前までは、いかに上手に抑制帯を結べるか、使いこなせるかといった時期であったからです。しかし、介護保険制度スタートに伴い、身体拘束のもたらす危険性を認識するようになり、介護・医療の現場で様々な

**分科会プログラム《風林火山》**

**第1分科会 『風』 感染予防・口腔ケア**

「感染症の予防」高久京子氏 (栃木県)  
「笑顔と言葉を取り戻すために」  
斉藤智津子氏 毛利友美氏 塚田祐子氏 (長野県)

**第2分科会 『林』 身体拘束・事故防止**

「利用者の主体性を支える援助」山本英清氏 (千葉県)  
「ヒヤリハット・事故報告書の分析結果から」  
千葉悦子氏 黒崎ひとみ氏 笹川範彰氏 (群馬県)

**第3分科会 『火』 介護予防・認知症予防・アクティビティ**

「地域密着型認知症サービスにおける介護予防の実践をとおして“見えてきたもの”」佐藤陸子氏 (神奈川県)  
「認知症高齢者に対する症状別介護マニュアル作成」  
内田千恵子氏 (東京都)  
「アクティビティ活動から学んだこと」  
勝俣裕美氏 渡辺芳江氏 (山梨県)

**第4分科会 『山』 ターミナルケア**

「特養ホームにおける看取り介護」岡和幸氏 (新潟県)  
「ターミナルケアから学ぶチームワーク」宇都宮和子氏 (茨城県)



**予告!!**

・第十五回(社) 日本介護福祉士会  
全国大会 平成二十年九月二十日(土)・二十一日(日)  
会場 群馬県伊香保温泉

・第十五回(社) 日本介護福祉士会  
関東・甲信越ブロック研修会

平成二十年六月二十一日(土)  
会場 大妻女子大学(東京)

ます。

工夫や事故対策に日々取り組んでいることが分かる。現在では、今回の発表をも含め「目に見える拘束」だけに意識を向けるのではなく行動の裏にある「心」、つまり「目に見えない拘束」の存在に気づき、心と体の拘束をなくしていく取り組みこそが介護の現場で求められていることを感じた。ヒヤリハットに関しても、事故分析にばかりとらわれず「ヒヤリ」とした瞬間を見逃さず感じ取る力が大切と学んだ。しかしこの分科会で一番目を奪われたのは、助言者の福田六花(りっか)先生でした。40代の男性で、ロン毛でソバージュと一見福祉に無縁の風貌ではあるが、老健施設長という立場で老人介護に情熱を持って取り組んでいる姿に熱いものを感じ取りました。

### 第三分科会 「火」

#### 介護予防・認知症予防・

#### アクティビティ

野澤可奈子

私は本年三月に介護福祉士として登録した新人です。普段は在宅ヘルパーとして活動してい

実感しています。ヘルパーとして活動しているときは冷静でい

ある認知症の方のデイサービス「まるなか」の佐藤睦子施設長の発表だったので大変よく理解できました。「まるなか」のデイサービスに通っておられる利用者の方のお宅へヘルパーとして入っていた時期がありました。訪問の度に「デイサービスに行くのがすごく楽しい」とお話ししてくださる方でした。利用者の方が楽しいからまた来たいと思ってくれる様にすることは施設の方はいろいろな努力をされています。あまり大規模では利用者の方へ目が行きわたりません。利用者2人に対して一人の介護職員を配置されているとのことですが、経営面でご苦労があるかと思いました。

次に発表された東京都の認知

症高齢者に対する症状別介護マニュアルも大変勉強になりました。家族が認知症ではないかと思った時に介護者は何をしておくべきかがよく述べられていると思いました。現在私も認知症状が現れた母と向き合うようになり、介護することの大変さを



### 第四分科会 「山」

#### ターミナルケア

友野まち子

「風林火山」の第四分科会「山」ターミナルケア」は、「特養ホームにおける看取り、その介護」「ターミナルケアから学ぶチームケア」による二事例の発表でした。「死を考えることはタブーではなく、生を輝かせること」死は特別なものではなく自然なものとして捉え、医療、職員間の連携を家族に提供していくこと。死んで行く者にも礼儀があり、「ありがとう」と言



武田信玄も来場しての楽しかった懇親会

きる看取りケアの重要性を助言者の長田看護師長(医) どちらペインクリニック玉穂ふれあい診療所)が提言され、死生学を改めて考えさせられました。また、今回のブロック大会で出会った人達との交流は、私個人の今後の人生の選択の迷いを払拭させてくれるものでした。人生は出逢い、人は人によって学び、成長させられる。その時々を点と財産とできるよう糧にしておく機会を与えられたように思います。

最後に印象に残った一語を記します。「夕日は、沈む時に光を放つ」

## 全国一斉介護相談

湘南東地区ブロック

理事 梅田 滋  
理事 熊谷真理子

湘南東ブロックでは、九月三十日(日)に介護相談を実施しました。会場は昨年に引き続き、藤沢市民祭りの会場で、藤沢駅のコンコース内で行いました。

あいにくの雨天で、人通りは例年の五分の程度でしたが、二十人近くの市民の皆さんが訪れ、介護予防の内容や地域の福祉施設の情報を確認されました。

藤沢市民祭りには、五年以上連続して参加しています。来年も協賛ブースのひとつとして、介護相談を行っていききたいと思っております。

○相談員 五名

○ボランティア 学生一名

○介護相談 十九名(抜粋)

- ・一人暮らしに関する相談
- ・知的障害者に関する相談
- ・介護予防について
- ・認知症に関する相談

- ・ホームヘルパーについて
- ・年金についての相談
- ・医療費制度について
- ・介護に関する相談
- ・身内の介護に関する相談

○チラシ配布 二〇〇部

○資料の配布

①藤沢市「わたしたちの介護保険」

②藤沢市「介護予防をはじめめるために」

③藤沢市「地域密着型サービス・ガイドブック」

④藤沢市、茅ヶ崎市・地域包括支援センター一覧表

⑤福祉用具カタログ

## 県西地区ブロック報告

県西地区ブロック

理事 平野 浩子

○平成十九年九月一日(土)

○潤生園在宅介護総合センター

「れんげの里」見学

・講演「介護福祉士に望むこと」

講師(社福)小田原福祉会

理事長 時田 純氏

(参加者 十八名)

「れんげの里」

平成十八年十一月開所

延べ面積 2439・53<sup>2</sup>m<sup>2</sup>

一階 デイサービス

(定員三十名)

二階 ショートステイ

(定員四十名)

小田急線蛸田駅下車徒歩五分周囲は田園地帯です。床などはコルク材を使用、四人部屋などの仕切りは障子を用いている。パワーリハのための機械を導入し、エントランスなども広く取つてある。食事へのこだわりとして、新調理システムの採用と「介護食」の提供。それ以外にも数々の工夫を凝らしています。

九月一日は「防災の日」であったため当初から人員が集まるのかと心配していましたが、無事に研修会を終了致しました。参加者の皆様ありがとうございました。

## 編集後記

今号は関プロ山梨県大会での佐藤理事の発表を中心に編集しました。又、大会参加者の皆様に記事をお願いしました。大会から一ヶ月余で本紙が発行できましたのは、事務局の星さんのおかげです。皆様の協力でホットな情報をお届けできました。

編集委員

岩田・佐藤・星

## ほほえみ 二十七号

発行 神奈川県介護福祉会

会長 野上 薫子

横浜市神奈川区沢渡四・二

県社会福祉会館内

電話045(311)8776

印刷 有限会社 金港堂

電話045(322)0234